シュタイナーの
カルマ論について

〔目次〕

・基本的な論点
　　過去からのカルマ
　　未来へのカルマ
　　過去と未来のカルマの相互関係

・主要講義とそれぞれの論点　その1
　GA34/GA135/GA120/GA235〜GA240

・主要講義とそれぞれの論点　その2
　GA235〜GA240（全6巻）

神秘学遊戯団

■シュタイナーのカルマ論①

・基本的な論点
　過去からのカルマ
　未来へのカルマ
　過去と未来のカルマの相互関係

・主要講義とそれぞれの論点　その1
GA34/GA135/GA120/GA235～GA240

「カルマ」というのは、
与えたものが与えられる。
簡単に言ってしまえば、そういうことだが、

それが通常の目に見えるような原因と結果の関係ではなく
物理的なものだけではなく、
エーテル体やアストラルや自我のレベルにおいても起こり、
さらにはそれが現在の時空だけではなく、
過去と未来においても現象する。

しかもその原因と結果は
複雑な関係性のなかで時空を超えて
関係しあいながら現象を生みだしていくことになる。

物理的な現象の場合は「カルマ」とは言わないだろうが、
そのもっぱらは同一時空における物質的な関係について
その因果関係が問題とされるのに対し、

「カルマ」といった場合には、
単純な物理的な関係ではない場合を指す。

「カルマ」というとき、その多くは
過去の生における原因が現在に現れる
といった意味で使われるだろうが、
それは過去の生だけではなく、
現在の生のなかにおいても、物理的な関係性を超えて、
与えたものはそれなりに与えられることになる。

後で基本的論点についてのところで少し詳しくまとめるが、
シュタイナーがカルマについて主に語っているのは、
mediopos4088（2026.1.28）の「運命」についての話でふれた
過去からのカルマとしての「月の門」と
未来へのカルマとしての「太陽の門」のような
過去からのカルマと未来へのそれという視点である。

さて、シュタイナーの「カルマ」に関する内容について
まとまった講義がなされているのは以下の通りである。
GA240の5講義分を除きすべて邦訳刊行されている。

『いかにカルマは作用するか』（GA34）
『いかにして前世を認識するか』（GA135）
『カルマの開示』（GA120）
カルマ論に冠する連続講義（GA235〜GA240）

とくに全6巻としてまとめられている
「カルマ的関連の秘教的考察」は、
1924年9月28日 、ドルナハにおいて
イタ・ヴェークマンの献身的な介護のもとで
病床から語られながら体力の限界で予定の半分程度しか話せず
途中で中断されたものも含み（GA 238・第11講）
最晩年に最も集中的になされた重要な内容となっている。

ほぼ邦訳があるとはいえ通常の場合、
全体を参照しかつ概観することは難しいと思われるので
ここではその基本的な論点と主要な講義について概観し、
理解のための補助となればと考えている。

まず基本的な論点について。

シュタイナーは「カルマ」を単なる報酬や罰のシステムではなく、人間が複数回の転生を通じて霊的に成長するためのプロセスとしてとらえている。カルマは人間の構成要素（物理体、エーテル体、アストラル体、自我）と密接に関連し、過去の行動が現在の生に影響を与える形で働いている。

以下主要な以下の観点を3つにまとめて概観する。

1）過去からのカルマ
2）未来へのカルマ
3）過去と未来のカルマの相互関係

1-0）過去からのカルマ（前の生が現在の生を形作る）

過去からのカルマは、死後の霊的世界で形成された「運命の糸」が、現在の人生に織り込まれる形で現れる。
これは、過去の行動（思考、感情、行為）が霊的な「種子」として蓄積され、それが現在の身体、性格、環境、出会いとして「実」となるものである。
シュタイナーは、それを人間の4つの構成要素（物理体、エーテル体、アストラル体、自我）を通じ、段階的に説明している。
過去のカルマは、現在の苦しみや喜びを「自己責任」の観点から理解させることで、成長の機会を提供するものであり、過去からのカルマは「固定された運命」ではなく、現在の自由意志で修正可能だとしている。
意識的な努力で、過去の負の影響をポジティブに転換できるのである。

1-1）身体と健康への影響

過去生での利己的な欲望や貪欲さが、現在のアストラル体に乱れを生み、それがエーテル体を通じて物理体に現れる。例えば、過去の過度な物質主義が現在の感染症や慢性疾患を引き起こす可能性がある。
たとえば、シュタイナーは過去の「嘘や欺瞞」が次の生で視力や聴力の障害として現れると述べているが、これは、霊的な視野を曇らせる行動が、物理的な感覚器官に反映されるためである。

1-2）性格と習慣への影響

エーテル体は過去の経験から形成され、気質（胆汁質、多血質、粘液質、憂鬱質）を決定する。
例えば、過去生での内省的な生活が現在の憂鬱質を生み、行動的な生活が胆汁質を生む。シュタイナーは、過去の「浅薄な知識追求」が現在の記憶力低下や集中力の欠如として現れると指摘している。
また、過去生での人間関係が、現在の家族や友人として再現される。たとえば、過去の敵対関係が現在の対立を生み、そこで和解することでカルマを解消することになる。

1-3）環境と運命への影響

外部の出来事（職業、社会的地位、自然災害）は、集団カルマや個人カルマの結果である。例えば、過去の民族的・集団的な行動が、現在の戦争や疫病として現れる。たとえばシュタイナーは、モンゴル侵略時代の恐怖が、後世のハンセン病のような疾患を生んだことなどを例示している。

2-0）未来へのカルマ（現在の行動が次の転生を形成する）

未来へのカルマは、現在の生で植える「種子」が、死後の霊的世界で次の生の条件を決めるものである。シュタイナーはこれを積極的な霊的発展を目指すものとしての「カルマの創造」であることを強調している。
現在の思考・感情・行為が、アストラル体からエーテル体、物理体へと段階的に移行し、次の生の基盤となるというのである。
重要なのは、自由意志による選択が未来を形作る点で、物質主義的な生活は負のカルマを生み、霊的な努力はポジティブなものを生むことになる。
また宇宙的視点として、シュタイナーは、キリストのような高い霊的存在が個人のカルマを地球全体の進化と調和させる「カルマの主」として働くため、現在の霊的努力が宇宙レベルの未来に寄与するとしている。

2−1）身体と健康への影響

現在の愛情深い行動や共感が、次の生で健康で若々しい身体を生む。たとえば、現在の「他者への思いやり」がエーテル体を強化し、次の物理体で強靭さや美しさとして現れる。一方、現在の憎悪や反感は、次の生で早い老化や病弱さを招く。
病気との関連でいえば、現在の不道徳な習慣（例: 過食や依存）が、次の生で特定の疾患として現れる。ただし、現在の治癒努力や瞑想が、これを軽減し、未来の健康を向上させるという。

2−2）性格と習慣への影響

現在の知的・道徳的な努力は、次の生の本能的な習慣となる。たとえば、現在の深い考察が次の記憶力や直感力を高め、浅薄な生活が次の散漫さを生む。シュタイナーは、現在の「信仰心」が次の知性として、またはその逆として交互に現れると述べていまる。
気質に関しては、現在のバランスの取れた生活が、次の気質を調和的にし、多様な経験を可能にするとしている。

2−3）環境と運命への影響

現在の行動が、次の生の出会いや環境を決める。たとえば、現在の協力的な関係が次の支援的なネットワークを生み、孤立的な行動が次の孤独を招く。集団レベルでは、現在の社会貢献が未来の平和な時代を形成する。

3-0）過去と未来のカルマの相互関係（循環と成長のプロセス）

シュタイナーは、過去と未来のカルマは循環的で、互いに影響を与えるとしている。過去のカルマが現在の「課題」を提供し、それをどう解決するかが未来のカルマを決めるのである。たとえば、過去の苦難が現在の試練として現れ、それを乗り越えることで未来の強さを生む。これは「カルマの変容」と呼ばれ、瞑想や霊的演習といった神秘学的な行によってそれを早めることもできる。その方法として、日常の「感情記憶」や「逆行記憶」が挙げられていて、それによって過去のカルマを洞察し、未来を意識的に形作ることができるとしている。

3–1）自由意志の役割

カルマは運命を強制するものではない。現在の選択で過去の負荷を軽減し、未来を向上させるものである。たとえば、 現在の赦しは過去の敵対カルマを解消し、未来の調和を生むこともできる。

3–2）注意点

カルマは決して罰ではない。現代のような物質主義の時代には、過去のカルマが神経質や精神疾患として現れやすく、未来へは霊的な無関心が弱い世代を生む可能性があるが、それは意識的な努力で逆転することもできる。その意味において、カルマは生を「霊的な旅」として位置づけ、過去を振り返り、未来を創造するツールとしてとらえることができる。

さて、続いて主要講義とそれぞれの主要テーマについて、
以下GAナンバー順に邦題と講義日程の一覧と基本的な論点を挙げる。

講義の回数がかなり多いので、
今回はGA34/GA135/GA120/GA235〜GA240のうち
以下のもののみをとりあげ、
GA235〜GA240に関しては「シュタイナーのカルマ論②」で。

『いかにカルマは作用するか』（GA34）
『いかにして前世を認識するか』（GA135）
『カルマの開示』（GA120）

●GA34
「霊魂の再受肉とカルマ」
「いかにカルマは作用するか」の2編

（1903-1904年頃）
※初期のエッセイ　いかにカルマは作用するか
（新田義之訳　みくに出版　1986/7）

GA34–3「霊魂の再受肉とカルマ」
（1903年10月・11月　Lucifer-Gnosis誌）
論点：生命が生命からしか生まれないように、魂も魂からしか生まれない。したがって、個人の魂は過去の人生から連続しており、転生とカルマは現代の科学的思考を徹底させた必然的な結論である。

GA34–4「いかにカルマは作用するか」
（1903年12月　Lucifer-Gnosis誌）

論点：睡眠のように、死後も前の生涯の行いの結果（欲望と経験）が残り、次の転生で自分自身の運命として再び出会う。人間は自分の行いによって運命を創造し、転生を繰り返す中で、経験を能力に変え、徐々に自由な精神へと成長していく。これがカルマの働きである。

□「カルマ論」集成全5巻
（西川隆範（1〜4）・松浦賢訳（5）／イザラ書房）

●カルマ論」集成1
GA135『いかにして前世を認識するか』

（1912年1月23日〜3月5日）

アントロポゾフィーの観点から、輪廻転生とカルマの概念を科学的に探求。
現代の文化や人間の精神生活への影響が論じられている。

1)1912年1月23日、ベルリン
いかにして輪廻転生する人間存在の核を観照するか。
論点：人間の本質的な内核が複数回の人生を通じて持続するものであることを認識することで、真の霊的洞察が生まれる。

2)1912年1月30日、ベルリン

輪廻転生を理解するために必要な感情記憶能力の形成。
論点：感情記憶とは、過去の体験を感情的に再現する能力であり、これが転生間のカルマの影響を意識させる。

3)1912年2月20日、シュツットガルト

輪廻転生とカルマについての経験を形成するための思考の訓練。
論点：過去の行動が未来の人生にどのように影響するかを想像する思考実験を挙げ、参加者が自身のカルマを内省的に探求する方法を示唆する。

4)1912年2月21日、シュツットガルト

前世と現世・来世におけるカルマの作用。
論点：過去生での特定の行動（例: 利他的な行為やエゴイズム）が次の人生でどのように報いや課題として現れるかを例証し、参加者に自身の人生を振り返らせる。

5)1912年3月5日、ベルリン

輪廻転生とカルマは人智学的世界観の基本理念である。
論点：カルマが現代の文化でどのように倫理的成長を促すかを説明し、参加者が霊的な行を通じて自身の転生を意識する方法を提案する。

●カルマ論」集成2
GA120『カルマの開示』

（1910年5月16日～28日、ハンブルク）
（高橋巌訳・春秋社版も有）

カルマとは何か。人間のすべての出来事（健康・病気・出会い・事故・自然災害）は、過去の行為の結果であり、同時に未来を新しく創造する機会である。人間は単独で存在しているのではなく、人類全体・地球全体・霊的な高次の存在たちと一緒にカルマを織りなしている。最終的には、キリスト衝動を通じカルマを「愛に基づく自由な行為」に転換していく方向へと進化していく。

1)1910年5月16日、ハノーファー

個人のカルマ・人類のカルマ・地球のカルマ・宇宙のカルマ
論点：カルマは「原因が生み出した結果が、原因を生んだ存在に本質を変えずに反作用する法則」であり、個人・人類・地球・世界の各レベルで交錯しながら働いている。この法則を認識することで、生の細部を理解し、より深く生きることが可能になる。

2)1910年5月17日、ハノーファー
カルマと動物

論点：動物界は人類の過去の姿・捨てられた部分を映す鏡であり、人類カルマが動物界を「犠牲」にして成り立っている。動物への同情は、この宇宙的つながりを再認識することで再び蘇る。

3)1910年5月18日、ハノーファー

病気とカルマ
論点：人智学は、病気を単なる不幸ではなく、カルマ的文脈で理解し、生全体の意味づけと向上の機会として捉える視点を提供する。

4)1910年5月19日、ハノーファー

治る病気と治らない病気
論点：カルマを理解することは、病気を進化の手段と見なし、治癒努力を促しつつ、不治の場合も高次の調和として受け入れることである。医師は霊学に基づき、患者の自己治癒力を支援しなければならない。

5)1910年5月20日、ハノーファー

自然な病気と偶然の病気
論点：病気をカルマの観点から理解すれば、自然病（内因）と偶然病（外因）の区別が明確になり、「偶然」はアーリマン的な幻惑として克服可能である。カルマは病気を進化の手段とし、霊的科学により病気を霊的プロセスに転換できる可能性が示唆される。

6)1910年5月21日、ハノーファー

事故とカルマ
論点：事故や外部原因の病気（感染症など）も、前の生の経験・行為・誤りがカルマ的に引き起こすものであり、内因性の病気だけでなく、外因性のものや「偶然の事故」も、深いカルマ的必然性に基づいている。

7)1910年5月22日、ハノーファー

天災とカルマ
論点：痛みは病気と不可分ではなく、ルシファー的な影響（内面的誘惑：貪欲、傲慢、情欲など）による病気に伴うもので、痛みは恵みの力（ルシフェルの対抗者）により生じ、再び誘惑に陥らないための「教育者」として機能する。痛みはアストラル体の異常な覚醒の意識であり、潜在意識においてカルマを果たし、魂を解放する。

8)1910年5月25日、ハノーファー

高次の構成要素とカルマ
論点：衛生措置（例: 天然痘ワクチン）は、前の不愛（無慈悲）の外的表現を除去するが、魂の傾向を残すことになる。ワクチンだけでは不十分で、霊的教育で魂を浄化しなければならない。外部（衛生）と内部（霊的成長）をバランスさせるのが人類進化の法則である。

9)1910年5月26日、ハノーファー

男と女・誕生と死
論点：外部の病気が防がれても、魂の空虚さ・物質主義が増し、内面的不満が生じ、霊的探求への渇望を強める。また現代の快適な生活が魂の停滞を生み、感覚追及の空虚さを招くが、これが霊的科学への道を開く。
女性の経験（感情的・霊的深さ）は魂に深く刻まれ、次の生で男性の体を形成する。男性の経験（知的・物質的浅さ）は魂に浅く、次の生で女性の体を形成する。性別は通常交互に繰り返される。

10)1910年5月27日、ハノーファー

カルマと自由意志
論点：現代科学は物質の構成を変化させるが、霊的観察では「すべての物質は凝縮された光」であり、魂の根本は「愛の変容・希薄化」である。地球存在は「光（物質的側面）」と「愛（魂的側面）」を織り交ぜたものであり、この二つの要素のバランスが健康・病気・進化の鍵となる。

11)1910年5月27日、ハノーファー

個人のカルマ・共同体のカルマ・人類のカルマ・霊的存在のカルマ
論点：カルマは個別的・人類的・高次の存在の三層でつながり、アントロポゾフィーはこれを理解・実践する力である。カルマは単なる因果ではなく、自由・愛・智慧への進化の道であり、それを内面的な力に変えるよう示唆される。

■シュタイナーのカルマ論②

・主要講義とそれぞれの論点　その2
GA235〜GA240（全6巻）

シュタイナーのカルマ論①
mediopos4099（2026.2.8）に続き
GA235〜GA240（全6巻）について
主要講義とそれぞれの論点をとりあげる。
なお、その中には未邦訳のGA240の5講義分も含まれる。

□「カルマ論」集成全5巻のうち3〜5
（訳者：西川隆範（3〜4）・松浦賢訳（5）／イザラ書房）

●「カルマ論」集成3
GA235『カルマの形成』
（1924年2月16日〜3月23日）

第一部　カルマ的諸力の形成

1）1924年2月16日、ドルナハ

・カルマの法則
論点：宇宙の階層（鉱物→植物→動物→人間）と時間・空間の法則の中で捉えるための基礎としてカルマの法則が示唆される。

2）1924年2月17日、ドルナハ

・鉱物・植物・動物・人間・霊的存在
論点：人間は宇宙の一部であり、宇宙から切り離されれば人間ではなくなる（指が体から離れれば指でなくなるように）。人間の周囲世界は階層的に分かれ、それぞれがカルマの異なる側面を形成している。

3）1924年2月23日、ドルナハ

・カルマと自由
論点：カルマ的必然性と自由は矛盾しない。自由は必然の「地面」の上でこそ可能（地面がなければ歩けないように）である。カルマを知ったとしても、それは「自分で築いた家」であり、住むのは合理的・自由な選択である。

4）1924年2月24日、ドルナハ

・愛と憎しみ・同時代人
論点：人類は15世紀以降、自由度・意識度が増し、無意識的なカルマ衝動から次第に意識的な理解へ移行する。未来においては、エーテル体の霊視が自然に現れ、行為のカルマによる結果を「絵」として見るようになり、愛と智慧でカルマを積極的に形成する時代が来る。

5）1924年3月1日、ドルナハ

・健康と病気
論点：カルマは単純な因果ではなく、生の各段階（幼少・青年・壮年・晩年）の関係性が複雑に絡み合い、補完し合う形で現れる。健康・病気・人間関係はすべて前世の魂的態度（興味・愛・エゴイズム）の変容として理解されなければならない。

6）1924年3月2日、ドルナハ

・頭部組織・胸部組織・四肢組織と霊的存在たち
論点：カルマは単なる因果ではなく、神々の創造的体験と人間の自由意志の相互作用である。人智学は、この神と人間の相互依存を再発見し、運命を理解・形成する鍵となる

第二部　個人の運命のカルマ的決定

7）1924年3月8日、ドルナハ

・フィッシャー・シューベルト・デューリング（謎の提示）
論点：カルマは各人間に固有で多様であり、抽象論ではなく具体例から学ぶことが重要である。この講義では、3人の特徴（フィッシャーの自己批判的率直さ、シューベルトの抑圧された激情、デューリングの明晰さと毒舌）は、前世からのカルマ的変容として理解されるべき基盤だとし、知的推論の限界と霊視の重要性が強調されている。

8）1924年3月9日、ドルナハ

・フィッシャー・シューベルト・デューリング（解明の試み）
論点：歴史は単なる因果の連続ではなく、人間の魂が転生を通じて過去の時代から現在へつなぐ糸 であり、特に重要な人物を通じて人類全体の進化が見える。

9）1924年3月15日、ドルナハ

・ハルトマン・ニーチェ
論点：身体的特徴・癖・些細な動作が前世からの運命の糸を明らかにする鍵である。身体は物質的ではなく霊的意義を持ち、頭部・リズム系・四肢系（運動・代謝系）の三重構造が転生間で変容・交代する。代表的人物（エドゥアルト・フォン・ハルトマン、フリードリヒ・ニーチェ）のカルマ関係を例に、身体的障害や癖から前世を遡る重要性を示唆している。

10）1924年3月16日、ドルナハ

・ベーコン・ダーウィン・ラプラス・ウィルソン
論点：現代から過去へのアプローチを逆転し、過去の歴史的人物から現代・後世へ カルマの流れを追う。アラブ・イスラム文化（アラビズム） がヨーロッパ文明に与えた隠れた影響を軸に、外見上の歴史（戦争・敗北）と霊的・文化的な継続 の対比を強調。個人の転生を通じて、文化の潮流が時代を超えて運ばれる 仕組みを示す。

11）1924年3月22日、ドルナハ

・ガリバルディ・レッシング・バイロン（謎の提示）
論点：現代から過去へ遡る だけでなく、過去から現代・後世へ 追うアプローチを導入。個人の運命だけでなく、歴史的・一般的なつながり を理解するための準備として、3人の人物（ガリバルディ、レシング、シュタイナーの恩師）の生涯の特徴を挙げ、運命の兆候 がカルマの鍵になるとしている。

12）1924年3月23日、ドルナハ

・ガリバルディ・レッシング・バイロン（解明の試み）
論点：過去の高い秘儀参入者が現代にどう転生しているかを問題提起し、ガリバルディを中心にその例を挙現代の教育・文明が魂の降臨を妨げ、古い叡智が身体に十分に入り込めず「背後に」残る 現象を説明。過去のイニシエートは、現代では「狂人」扱いされるほど異質な形で現れ、外見的業績より内面的・霊的側面 で評価されるべきだとしている。

●「カルマ論」集成4
GA236『歴史のなかのカルマ的関連』
（1924年4月6日～5月11日）

第一部　人類の歴史的生成に関するカルマ考察

1）1924年4月6日、ドルナハ

・マルクス・エンゲルス・ハウスナー
論点：人間が現世で経験するものは、外部世界（自然・星辰・宇宙）だけでなく、過去の地上生の結果を内的に持ち込むものである。特に、アストラル体と自我は過去の生涯の影響を強く受け、肉体・エーテル体のみが現世の外部世界に由来する。

2）1924年4月12日、ドルナハ

・ランケ・シュローサー・マイヤー
論点：人智学運動の歴史を振り返り、1918年以降の試み（科学的なアプローチや宗教的統合）が反対勢力を生み、運動が混乱したとし、クリスマス創立会議以降、運動は新しい方向性を持ち、相手との議論を避け、霊的世界の要求に従うべきだと強調している。

3）1924年4月23日、ドルナハ

・ペスタロッチ・エマーソン・グリム
論点：自然界の観察だけでは不完全で、人間こそが宇宙の縮図（ミクロコスモス）であり、歴史は転生を通じて連続する。人智学は倫理的衝動を生み、傲慢ではなく謙虚さを育む。過去の時代が人間を通じて後世に受け継がれる具体例が挙げられる。

4）1924年4月26日、ドルナハ

・イプセン・ウェーデキント・ヘルダーリン・ハマーリング
論点：単なる知識ではなく、人間理解と愛を深め、単一人生ではなく転生の連続を通じて人格を捉えることが重要である。過去の時代が人間を通じて後世に受け継がれる例を挙げ、歴史的変化（特に現代の物質主義的体質）が秘儀入門者の転生に影響を与える点を説明している。

5）1924年4月27日、ドルナハ

・ルドルフ皇太子
論点：個人が過去の経験を後世に持ち込み、歴史的事件の根底に道徳的因果を明らかにする。単一の生だけでは理解できない現象が多く、日常の不可解さに驚嘆し、深い探求心を育むことが人智学の出発点となる。歴史的事件が無意味に見えても、後世の魂の衝動としてバランスが取れ、未来に働くことになる。

第二部　個々人の人生のカルマ的考察

6）1924年5月4日、ドルナハ

・実践的カルマ考察――人間の背後の土星衝動・太陽衝動・月衝動
論点：カルマ研究の新たな視点として、歴史的連続から直接的な生への適用へと移行する。カルマ理解は道徳的・魂的生活を活性化・深化させ、人生の謎を解く鍵となる。現代の意識においてはカルマが隠されやすく、客観的観察が難しい。人智学を学ぶと、かえってエゴイズムが増す危険があるが、真の成長は外界への興味拡大・他者への没入にある。

7）1924年5月9日、ドルナハ

・カルマ洞察の方法
論点：カルマの認識を可能にする魂の内面的活動について。物理界の現象は感覚で捉えられるが、カルマ的つながりは霊界（エーテル界・アストラル界）にあり、無意識の感覚活動では見えない。現代人は本能的霊視を失ったため、意識的に霊的観察を養う必要がある。

8）1924年5月10日、ドルナハ

・身体形姿に現れる前世のありよう
論点：カルマの展開を人間の外形的・身体的現れ（顔立ち、ジェスチャー、全体の体型）から観察する方法について。外見の細部は前生の道徳的・霊的態度を反映し、身体は前生の非頭部（四肢・胴体）が頭部に、前生の頭部が次生の四肢・胴体に転化する。

9）1924年5月11日、ドルナハ

・月に棲む原初の導師たち
論点：カルマの内面的・道徳的・霊的側面、特に死後・転生間のプロセスにおける月の霊の役割について。カルマは霊的であり、身体的現象（例：病気）にも霊的起源がある。

●カルマ論」集成5
GA236『宇宙のカルマ』
（1924年5月16日〜6月29日）

第一部　死の直後、地上の人生をさかのぼって体験する際のカルマの形成

10）1924年5月16日、ドルナハ

論点：カルマの形成と実現を死後・転生間の霊的過程と地上の自然法則・霊的法則の関係から考察。カルマの種は死直後の後退的体験で形成され、月の霊の介入で強烈に刻印される。地上では霊的意図が自然法則に阻まれ実現しにくいが、死後・転生間に霊的実現が起こり、次生で物理的に果たされる。

11）1924年5月18日、ドルナハ

論点：カルマの展開を宇宙的・霊的階層（Hierarchies）の働きと人間の一生の時期（7年周期）から考察。人間は空間的には鉱物・植物・動物界を、時間的には高位霊界（第三・第二・第一階層）を内包し、これらが人生の各段階で「自我」に影響を与え、カルマを形成・実現する。

12）1924年5月29日、ドルナハ

論点：カルマの形成と展開を人間の一生の時期（7年周期）と霊的ヒエラルキーの働き、さらに惑星圏（月・水星・金星・太陽・火星・木星・土星）の影響から具体的に考察。死後・転生間の体験が次の生のカルマにどう反映されるかを、歴史的個性の例で示す。

13）1924年5月30日、ドルナハ

論点：カルマの本質を理解するための鍵として、イマジネーション・インスピレーション・イントゥイションの段階を通じて、人間が身体を超えて宇宙的・霊的存在（特に高位階層）とどう結びつき、カルマが形成されるかをについて。現代人はこれらの法則に無知だが、超感覚的認識により、カルマは単なる因果ではなく、ヒエラルキーの織りなす霊的現実であることが明らかになる。

第二部　カルマの宇宙的形態とカルマ的関連の個人的観察

14）1924年6月4日、ドルナハ

論点：クリスマス・イースター・ペンテコステ（聖霊降臨）の三大祭を、カルマ理解の基盤として位置づけ、人間存在の三重性（身体・エーテル体・アストラル体）と宇宙の三重性（物理・エーテル・アストラル）を結びつけ、地上の空間世界と死後・転生間の時間世界の関係を深く探求する。現代人は空間に閉じこもり、時間を失ったが、三大祭を通じてこれを回復することで、カルマの本質に迫ることができる。

15）1924年6月22日、ドルナハ

論点：カルマ研究の難しさと責任を強調しつつ、現代人が失った霊的法則の理解を求め、カルマの本質を地上の自然現象や人間の無意識領域にまで遡って探求する。クリスマス創立会議以降の新しい人智学運動の精神を再確認し、講義内容の厳密な扱いを要求する。

16）1924年6月27日、ドルナハ

論点：カルマの法則を理解するための霊的ヒエラルキーと人間の人生段階の深い結びつきをさらに深化させ、地上の自然現象（火山・地震など）や人間の運命が、死後・転生間の霊的過程とどう関連するかを探求する。カルマは単なる因果ではなく、神々の霊的な織物であり、自然界の現象も人類のカルマ的集団の選択によるものである。

17）1924年6月29日、ドルナハ

論点：人類のカルマと地球のカルマは密接に結びつき、戦争や憎悪などの人間の悪が、自然災害として現れることがある。こうした災厄は、神々がアーリマン・ルシフェルの悪を善に転換するための手段であり、神々の戦いの現れである。神々は人類の運命を悪の手から守り、正義の道へ導く。

□GA237-GA240（4巻分）
　カルマ的関連の秘教的考察（涼風書林）
（浅田豊・丹羽敏雄訳）

●GA237『アントロポゾフィー運動のカルマ的関連』
（1924年7月1日～1924年8月8日）

アントロポゾフィー運動（アントロポゾフィー協会）の参加者たちのカルマ的つながりに焦点を当てたシリーズ。アントロポゾフィー運動に参加する人々は、長い過去世の準備（特にミカエル霊との関係）を持って集まっている。
現代の物質主義時代に霊的探求を求める魂は、特別なカルマ的背景を持つ。
運動内の人間関係・協力・対立は、すべて過去世からの深いカルマ的つながりによるもの。
1879年からのミカエル時代が、カルマの新しい質を生んでいる。

1)1924年7月1日、ドルナハ

論点：カルマ研究の導入。アントロポゾフィー運動への参加は深い過去世の準備によるもの。知的・物質主義の時代に霊的衝動がどう準備されてきたか。歴史的・霊的文脈での「なぜ今ここにいるのか」の始まり。

2)1924年7月4日、ドルナハ

論点：宇宙におけるカルマ準備の力。感覚界と霊界の境界で働く力（特にミカエルの霊）。過去の時代（中世以前）から流れてきた霊的衝動が、現代の魂にどう準備されてアントロポゾフィーへ導かれるか。

3)1924年7月6日、ドルナハ

論点：アントロポゾフィー的努力の霊的基礎。アントロポゾフィー運動に参加する魂の状態。物質主義の時代に霊的探求を求める魂の特徴と、その宇宙的背景。

4)1924年7月8日、ドルナハ

論点：アントロポゾフィーを求める魂の状態。ミカエル時代（1879年以降）の始まりと、それに伴う新しいカルマ的リズム。アントロポゾフィストの魂が過去に秘教的共同体で結ばれていたこと。

5)1924年7月11日、ドルナハ※

論点：ミカエルの霊の流れとアントロポゾフィー運動。ミカエル派のカルマ的衝動。物質主義に対抗する霊的知性の準備。

6)1924年7月13日、ドルナハ

論点：アラビア文化・イスラム文化とキリスト教神秘学のカルマ的対立。過去の文化圏（アラビア主義、アリストテレス主義、プラトン主義）の流れが現代の運動にどう影響するか。

7)1924年7月28日、ドルナハ

論点：薔薇十字主義とミカエルの霊の関係。アントロポゾフィー運動内の二つの流れ（薔薇十字的・ミカエル的）。過去世での秘教的体験が現在の衝突や協力にどう現れるか。

8)1924年8月1日、ドルナハ

論点：ミカエルの時代の知性とカルマ。知性が地上に降りてきたことによる新しいカルマ的状況。アントロポゾフィストの人間関係が天使界に及ぼす影響。

9)1924年8月3日、ドルナハ

論点：ミカエルの力の流入とそのカルマ的意味。アントロポゾフィストと非アントロポゾフィストの出会いが天使たちの運命にどう影響するか。霊的分離の始まり。

10）1924年8月4日、ドルナハ

論点：アントロポゾフィー運動のカルマ的構造の深化。過去の秘教的共同体から来る魂の集まり。運動内の人間的葛藤もカルマ的必然。

11)1924年8月8日、ドルナハ

論点：総括と展望。ミカエル時代におけるアントロポゾフィストの使命。カルマ理解が個人の霊的成長と運動全体の未来にどうつながるか。

●GA238『アントロポゾフィー運動と現代の霊的生活』
（1924年9月5日から9月23日）

アントロポゾフィー運動の参加者は、アリストテレス・ミカエル流やプラトン流の長いカルマ的準備を経て集まっている。
具体的な歴史的人物（アレクサンドロス・アリストテレス、ゲーテ、シュレーアー、カンパネラなど）の転生例が多数挙げられ、魂のつながりが明示される。
1879年からのミカエルの時代において、知性と霊性の新しいカルマ的関係が生まれている。
カルマは個人だけでなく、運動・時代全体の運命として働く。

1）1924年9月5日 、ドルナハ

論点：カルマ研究の真剣さの必要性。外的な職業・社会的立場ではなく、内面的な魂の力・道徳的関係がカルマの本質。アントロポゾフィー運動のカルマ的背景の導入。

2）1924年9月7日 、ドルナハ

論点：カルマの糸は外面的な職業ではなく、魂の内面的抵抗・道徳関係に結びつく。ルートヴィヒ・シュライヒとアウグスト・ストリンドベリの例で、過去世のカルマ的つながりを示す。ミカエルの流れの準備。

3）1924年9月10日 、ドルナハ

論点：ミカエルの流れとアリストテレス・アレクサンドロスのカルマ的連続。アレクサンドロス大王とアリストテレスの短い再会。過去の流れが現代の精神生活にどう影響するか。

4）1924年9月12日 、ドルナハ

論点：ミカエルの流れ流の歴史的経過。16-17世紀にキリスト教外の要素が流入するが、アリストテレス派は超感覚界で働き続ける。プラトン派の影響。シャルトル学派の意義とカルマ的文脈。

5）1924年9月14日 、ドルナハ

論点：シャルトル学派の画像を基に、過去の魂の流れを議論。ユリアヌス帝の魂の転生例（中世の女性人格へ）。パルチヴァル伝説とのつながり。カルマ研究の方法論的難しさ。

6）1924年9月16日 、ドルナハ

論点：ゲーテの精神に超感覚的に流入したミカエルの流れの縮図（「緑の蛇と美しい百合」の童話の源）。ティコ・ブラーエの個性などの役割。ミカエルの時代のカルマ的浸透。

7） 1924年9月18日 、ドルナハ

論点：死と再生の間のカルマ調整のプロセス。過去世の出来事が霊界で他の魂・ヒエラルキーと協力して練られる。現代の精神生活へのカルマ的影響の例。

8）1924年9月19日 、ドルナハ

論点：具体的な転生例の深化。アントロポゾフィー運動に関わる魂の流れ。過去の秘教的体験が現在の人間関係に現れる。

9）1924年9月21日 、ドルナハ

論点：トマス・カンパネラの例（ユートピア思想家）。過去の女性人格から男性へ転生し、捕らわれの経験を経て現代へ。カルマ的補完の例。

10）1924年9月23日 、ドルナハ

論点：カール・ユリウス・シュレーアーの個性（ゲーテ研究者）。ソクラテスの再来の示唆。プラトン流がゲーテに変容して現れる。知性のカルマ的変容。

11）1924年9月28日 、ドルナハ

論点：シュタイナーの最後の言葉（病のため中断）。ミカエル時代の使命、アントロポゾフィーの未来、カルマ理解の重要性。エリアス・ヨハネ・ラファエル・ノヴァーリスの個性の連続を背景に、霊的闘争と信頼の呼びかけ。

●GA239『カルマ的・宇宙的関連から観た人生』
（1924年3月29日～4月5日）

死後～再生までの霊界（惑星圏）で、階層的存在と協力してカルマが形成・調整される。
月のカルマ（過去の蓄積・記憶）と太陽のカルマ（未来への新しい形成）の区別が鍵。
出会い・好悪・病気・死はすべてカルマ的。不可解な感情は過去世の証。
キリスト教・イスラム文化の影響、ミカエルの時代の変化をカルマ的に扱う。
アントロポゾフィー参加者の魂は、こうした法則の中で特別な位置にある。

1）1924年3月29日、 プラハ

論点：人間の運命理解への導入。アントロポゾフィーが物質界を超えて意識を高める。運命の力（カルマ）が人生の出来事から感じられる。出会いの不可解な感情（好き・嫌い）が過去世のカルマ的つながりから来ること。

2）1924年3月30日、 プラハ

論点：月的存在（過去を保持）と太陽的存在（未来へ向かう）の違い。月のカルマ（過去の蓄積）と太陽のカルマ（新しい形成）の区別。イニシエーション科学により、過去世の共有体験が鮮明に浮上する仕組み。

3）1924年3月31日、 プラハ

論点：キリスト教的・モハメット的（イスラム的）思考の影響とカルマ。過去の文化圏の流れが現代の魂にどう現れるか。出会いが新しいカルマを生むか、過去のカルマを果たすかの違い。

4）1924年4月5日、プラハ

論点：死後～再生までの霊界体験の深化。月圏・水星期・金星期でのカルマ形成の始まり。人間の身体形成とカルマの関連。

●GA239『カルマ的認識と霊的・宗教的人生への衝動』
（1924年5月23日～5月25日）

5）1924年5月23日、パリ

論点：太陽圏でのカルマ作業。セラフィム・ケルビム・座天使との協力。次の人生でのカルマ実現が神々の行為として先に体験される。

6）1924年5月24日 、パリ

論点：火星圏・木星期・土星期でのカルマ調整。階層的存在（ヒエラルヒー）との協力。土星圏で主に形成される強いカルマ衝動。

7）1924年5月25日 、パリ

論点：カルマの宇宙的形態。月のカルマと太陽のカルマのバランス。キリスト教神秘とミカエル霊の関係をカルマ的に見る。アントロポゾーフの使命。

●GA239『人間生活の運命を形成するカルマ』
（1924年6月7日〜6月15日）

8）1924年6月7日 、ブレスラウ

論点：月圏と人類の原初教師。死後の体験とカルマの最初の種。霊界での逆行的人生回顧。

9）1924年6月8日 、ブレスラウ

論点：水星・金星・太陽・火星・木星・土星圏での死後体験。階層的存在がカルマを形成するプロセス。身体各部（頭・胸・四肢）とカルマの関連。

10）1924年6月9日 、ブレスラウ

論点：世界史におけるカルマの効果。土星圏の働き。過去のカルマが現世の運命にどう現れるか。

11）1924年6月10日 、ブレスラウ

論点：病気・障害・死のカルマ的意味。運命の形成としてのカルマ。霊的視点からの健康と病。

12）1924年6月11日 、ブレスラウ

論点：人間関係のカルマ的起源。不可解な好悪の感情が過去世のつながりから来ること。新しいカルマの紡ぎ方。

13）1924年6月12日 、ブレスラウ

論点：夢や直感に現れる他者とのつながり。霊魂の過去世共有。カルマが現在進行形で織られる例。

14）1924年6月13日 、ブレスラウ

論点：カルマの個人生命的意味の深化。歴史的人物を通じたカルマ例。

15）1924年6月14日 、ブレスラウ

論点：ミカエル時代におけるカルマの新しい質。アントロポゾフィー運動内の魂の流れ。

16）1924年6月15日 、ブレスラウ

論点：総括。カルマ理解が道徳的・宗教的生活をどう変えるか。未来への展望。

●GA240『太陽の門と月の門』
（1924年1月25日～2月6日）

カルマは意志領域（人間関係・出会い・好悪）が主で、知性領域は非カルマ的要素が多い。
死後、惑星圏（特に火星・木星・土星）で階層的存在と協力し、カルマを調整・形成。
月のカルマ（過去の共有）と太陽カルマの（新しい形成）のバランスが鍵。
1879年以降のミカエル時代で、知性が地上に降り、カルマの質が変わり、アントロポゾフィー参加者の魂に特別な使命を与える。
シリーズの集大成として、理論的総括とミカエル霊の使命、アントロポゾフィーの未来への展望がなされる。

1）1924年1月25日、ベルン

論点：月と太陽の二つの門を通じた人間のカルマ的つながり。出会いが意志に強く影響する場合（好悪・印象が残る）は過去世の深いカルマ的関係。知的な判断のみの出会いはカルマ的つながりが薄い。月のカルマ（過去の共有）と太陽のカルマ（未来の形成）の区別。

2）1924年4月16日、ベルン

論点：出会いの二つの型：無意識的に道を調整して出会う（月的・過去のカルマ）と、出会い後に新しいカルマを紡ぐ（太陽的・未来のカルマ）。意志領域でのつながりがカルマの本質。幼少期からの無意識的準備。

3）1924年1月28日、チューリヒ

論点：月圏でのカルマ植え付け（共有運命の記録）。月的存在が過去の共同体験を記録し、再生前に魂に刻む。出会いが「必然的」に感じられる理由。月的要素（過去）と太陽的要素（現在・未来）の織りなす運命。

4）1924年2月6日、シュトゥットガルト

論点：歴史的発展におけるカルマ的つながり。繰り返し生の具体例（バイロン、ガリバルディなど）。過去世の体験が霊界を経て現世に持ち込まれる。アントロポゾフィー運動の歴史的文脈でのカルマ研究の重要性。

●GA240（※未訳）
（1924年4月9日～7月20日）

5）1924年4月9日、シュトゥットガルト

論点：人間のカルマがどのように個人の人生と人類の歴史的発展に結びつくか、特にカルマの法則が個人の運命形成にどう作用するかを扱う。過去生の影響が現在の性格や行動に現れる点に焦点を当て、カルマを真剣に受け止めることの重要性を強調。

6）1924年6月1日、シュトゥットガルト

論点：死後〜再生間のカルマ形成プロセス。エーテル体が宇宙に溶け、惑星圏（火星・木星・土星）で階層的存在と協力してカルマを練る。長い太陽圏滞在での魂のつながり。強い運命は土星圏で最終調整。

7）1924年7月18日、アルンヘム

論点：アントロポゾフィー協会のカルマ。ミカエル時代の霊的闘争と運動内の人間関係。Archangeloiの働き。カルマが協会の運命にどう影響するか。霊的視点からの健康・病気・人間的つながり。

8）1924年7月19）日、アルンヘム

論点：ミカエル霊の宇宙的役割の深化。知性の地上降下とカルマの変化。アントロポゾーフの使命と霊的分離の時代的意味。

9）1924年7月20日、アルンヘム

論点：総括：ミカエル時代の知性と霊性の関係。年齢段階ごとの霊的洞察（21-42歳：太陽、42-49歳：火星など）。ミカエル共同体の呼びかけ。アントロポゾフィー運動の未来とカルマ理解の重要性。

●GA240『ミカエルの太陽諸力によるキリスト教の深化』
（1924年8月12日〜8月21日）

10）1924年8月12日、トーキー

論点：過去生の果実が次の人生にどう持ち越されるか。ミカエルの支配期における知性とカルマの関係を導入。クリスマス基礎会議後のアントロポゾフィー運動の新しい衝撃を背景に、カルマを歴史的・個人的に真剣に考察する必要性を述べる。歴史例を挙げて、過去から現在への運命の連続性を示す。

11）1924年8月14日、トーキー

論点：歴史の中のカルマ的つながり、特にハールーン・アッラシードとその顧問の例を通じて、過去の文化・知性がどのように後の時代（例：中世ヨーロッパ）に影響を与えたか。ミカエル衝動が知性の宇宙的流れにどう関わるかを論じる。

12）1924年8月21日、トーキー

論点：ミカエルと宇宙的知性の関係が中心。ミカエルが人類の知性をどのように導き、カルマの法則を通じて個人の発展と人類進化を結びつけるか。知性の堕落やアーリマン的影響に対するミカエル的な対抗を強調。

●GA240『現代における個々人と人類の霊的成長とカルマ』
（1924年8月24日～1924年8月27日）

13）1924年8月24日、ロンドン

論点：カルマの法則が個人の人生と人類全体の進化にどう作用するか。特定の歴史的人物や文化の流れを通じたカルマの具体例を挙げ、過去生の行為が現在の運命にどう反映されるかをさらに深める。

14）1924年8月24日、ロンドン

・論点：同じ日に2講義あり、午後は人類のカルマ的発展の続き。アントロポゾフィー運動のメンバーや社会全体のカルマ的責任、ミカエルの時代における知性の再獲得と霊的進化の必要性を扱う。

15）1924年8月27日、ロンドン

・論点：シリーズの締めくくりとして、個人のカルマと世界進化の統合。ミカエル衝動の下で人類がカルマを意識的に扱うことの重要性、霊的認識を通じて過去・現在・未来をつなぐ視点。アントロポゾフィー運動がカルマ理解を西欧にもたらす使命を強調。